

# あるディアスポラの知識人による台湾独立運動

—張繼昭(Andy Chang)と「台北俳句会」の事例をもとにして—

国際俳句交流協会 染川清美

## 1 目的

張繼昭(Andy Chang)の歴史的経験と記憶から、その主張する台湾独立運動に至るまでと、「台北俳句会」と関わって、ディアスポラとしての台湾独立運動について論点を絞る。しかし、それは単に歴史的経験と記憶のみに留まらず、台湾に在る日本語俳句会「台北俳句会」との関わりによって、庶民のささやかな嗜みである俳句創作の営みの中に影を落とす、政治性をも追求することになる。そしてまた、政治活動を推進する現在の張の立ち位置と未来性を、分析・展望することでもある。

張は、「政治に関わらない」(政党支持に関わることや、過去戒厳令下では、支配者だった日本を最良なこと等を指す)ことを不文律とする「台北俳句会」に席を置き、戦後留学帰化したアメリカ・カリフォルニアの地から出自の台湾と日本等に向け、台湾独立の呼びかけをするディアスポラの知識人である。従って本稿での台湾独立運動は、台湾以外の他国での活動を中心に置く。台湾独立論について述べるのではなく、ディアスポラとしての個人の独立活動に焦点を当てたものは、これまでにはない。

## 2 方法

張の「私の俳句歴」を基に、下記先行諸文献によって検証する。更に、張の台湾独立活動ツールであるAC通信並びにその著作を参照引用しつつ、筆者から張への質問に対する回答のEメールで補強し、「台湾独立運動関連年表」(1945-2002年)や他メディア『NEWSWEEK』などの参照比較によって、更なる詳細な分析を試みる方法を探った。

## 3 結果

バンダの定義する知識人としての張が、自分の信ずる真実と正義に従い、台湾在住の人々の側に立って、常に進んでいる姿が浮上した。それはサイドの言う、中間的などっちつかずの立場を常に感じながら生きることを余儀なくされている者の姿でもあり、こうした苛立たしい中間的存在であるということの証左である。そのことが、張のディアスポラの立ち位置を感受させ、その中間的存在であることを逆手にとりつつ、NYタイムズ広告欄に「台湾人民建國宣言」を掲載するなど、常に前進する人物像と苦悩を鮮明にした。

## 4 結論

張の活動が日本人に日本語でなされることには、忘れ得ぬ日本の戦前の快い経験と記憶へと向かう志向性があり、「台北俳句会」会員としての表現活動は、その記憶との関係性を、現在もなお持続させるためのツールであると言えよう。同時に、忘れ得ぬ2つの中国に対する逆の想いがあり、それが台湾人への熱烈な思いとなって、活動の原動力の一つとなっているのである。

## 文献

成瀬千枝子 2001 「戦後台湾におけるアメリカ留学(I)」 「同(II)」『交流』634号 635号 交流協会

陳天璽 2002 「台湾系華人移民」 『アジア遊学』第39号 勉誠出版

Edward W. Said, *Representation of the Intellectual*: 1994 *the 1993 Reith Lectures*, Vintage, (= 1998

大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社ライブラリー236 平凡社

若林正文 2004 「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」 『思想』1月号